

●つかもとたかせ

1986年1月16日生まれ。能代市ニツ井町出身。幼少の頃より音楽に触れ、国際教養大学でblack music historyを学ぶ一環としてgospelに出会いボーカリストとしての自我に目覚める。2014春、歌修行のため単身ニューヨークへ。現地ライブハウス、ストリート、黒人教会など、本場の地で歌唱力を磨く。2017年5月に1stアルバム「GOLD」をリリース。収録曲「わかったんだ」がエフエム秋田のマンズリーソングに選出。秋田ノーザンハビネッツ戦のオープニングアクトで2千人以上の観客に歌声を届ける。ゴスペルディレクターとしてワークショップやレッスンを実施し、活動の幅を広げている。



歌手／ゴスペルディレクター

塚本 タカセ

故郷の食卓を歌心に

歌うときも、曲を作るときも常に心の中に在る風景、それは地元秋田の風景。特に自分が育った能代市ニツ井町切石という地区のさまざまな光景が目に見えます。地元の郷土芸能である「切石ささら踊り」に子供の頃から参加しましたが、思えば故郷の存在は色濃いものだったと感じます。

その中でもやはり、十代までを過ごした建て替える以前の実家の風景は今でも鮮明に残っています。居間のソファで見るテレビ、立て掛けたエレキギター、舗装した庭、線路とその奥に広がる畑、そして晩ご飯の食卓。

両親共働きだったので、基本的に平日の晩ご飯は料理上手の祖母が作ってくれ、まあよく食べました。炊き立ての白米が大好きで、晩ご飯がきりたんぼ鍋だとがっかりしたもの。美味いおかずを茶碗に盛ったご飯で食べたいからです。カレーライスもよく食べましたし、2日目の朝カレーは何よりも楽しみでした。土曜日の昼間は大きなオムライスが定番で、必ず多めに作ってくれるケチャップライスがフライパンに残っているの、オム無しでお代わりをします。おかげでポッチャリな時代は長かったけど、とっても幸せだった証だなと思います。ちなみに塚本家はあきたこまち一択。

大学入学を機に実家を離れるわけですが、1年目は全寮制。ありがたいうちに学食はご飯食べ放題という悪魔の誘惑付き。食べ盛りがまだ終わらない18歳はまたしても太るわけです。しかし、2年生になってアパート自炊生活が始まると、音楽の力により奇跡の激ヤセを経験します。

全国各地から面白い価値観を持った同級生が集まった大学。音楽好きの友人たちのおかげで、それ以前に比べてますます音楽のとりこになっていました。そんな環境で、親からの仕送りをいかにCDや音楽機材に

割くか、それには食費をケチるといいうのが一番分かりやすい回答。そんな大学生らしい生活を送るも、3年生の時ついにアメリカへ留学します。現地での学生生活が始まり、初日のカフェテリアにてホットドッグやハンバーガーが食べ放題、これぞアメリカ！最高！と感じたのも初日だけ。いわゆるジャンクフード主体の食生活はすぐ飽きました。アジアンなメニューがたまにあつたり、サラダももちろん食べることができましたが、素材の味がまるで違い、地元ですつと食べてきた物の美味しさに気付かされた良い機会であったなと思います。友人とたまにする自炊で食べる日本米はアメリカ生活での癒やしだったし、日本から届く仕送りの段ボールに入れられていた「いぶりがっこ」の匂いに思わず笑いが込み上げたものです。

30歳手前にして上京し、段々と体調の事を気にするようになりまし。音楽でも何の仕事でも体が資本なことに違いはありません。十代の頃のようにはさすがに食べなくなりましたが、お米は日々の活力ですね。自然と自炊にも磨きが増え、おかずのレパートリーは結構増えましたし、美味しいおみそ汁を作ることもご飯を美味しく食べるために重

要だなと最近感じます。

地方出身者が東京に住むと必ずといっていい程、故郷のグルメの話は本当に美味しいよ」と語っている自分がいます。誇らしい気持ちで。今はコンサートやゴスペルワークショップを行うために故郷に帰るのが毎回楽しみで仕方ありません。

東京で暮らしているといろいろな品種のお米を手軽に手に入れることができますが、どれを試しても、結局いつも戻ってくるのはあきたこまち。特徴的な粘り気と甘み、そしてあの頃の風景を思い出させてくれる不思議な栄養素を持ったお米です。



1stアルバム「GOLD」。

秋田ノーザンハビネッツ戦のオープニングアクトを務め、熱唱。